Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2014, Vol.23, 121-129

論 文

道徳の時間における対概念の対比型授業デザインの開発（Ⅰ）[1]
－対概念の対比をとおした道徳的価値の本質へのアプローチ－

假屋園　昭　彦〔鹿児島大学教育学部（教育心理学）〕

Approach to essence of moralistic value in the way of contrasting pair moralistic concept Ⅰ
－The developmental study of moral lesson design to contrast pair moralistic concept－

KARIYAZONO Akihiko

キーワード：道徳的価値、授業デザイン、道徳の時間、対概念の対比

１．対概念の対比による概念の本質への迫り方

（１）本研究の目的

本研究では，道徳的価値の本質を発見する試みとして，対概念を対比させるという思考過程を提案する。この試みは，道徳的価値概念を対にして取り上げ，対比させ，その関係性を明らかにすることによって，対になっている概念の本質を明らかにする思考過程である。この思考過程にもとづく授業デザインを，価値の対比型授業デザインと命名する。

道徳には対になっている概念が多い。たとえば，理想と現実，清と濁，生と死，強と弱，全体と個，有限と無限，快と苦，知と不可知，善と悪，情と知，理性と感性，愛と憎，やさしさと厳しさ，自力と他力，偶然と必然，というように多くの道徳的価値概念が対になっている。

本研究ではこれらの対概念について，以下のような仮説を立てる。道徳に含まれる対概念は，互いに相反する関係として対立しあっているのではなく，実は一体的で不即不離の関係にある。その一体的で不即不離の具体的な関係性を明らかにすることによって，対を構成している概念の本質を捉えることができる。これは概念を対比させることによって，概念の本質を浮き彫りにする思考過程である。

このような仮説のもとに，本論文では道徳的価値概念を対にして取り上げ，対比させ，その一体的で具体的な関係性を理論的に明らかにすることは可能かどうか，を試みることを目的とする。その試みとしてニーチェの永遠回帰論に埋め込まれている対概念を浮き彫りにし，その具体的関係性を理論的に明らかにする。

もし対概念の具体的関係性を明らかにすることが可能だった場合，この思考過程で展開する道徳の授業デザインを開発することを目指す。

（２）価値概念の対立は本当に対立なのか

ニーチェは「善悪の彼岸」という本のなかで次のような指摘をしている。すなわち彼は，「形而上学者（いままでの哲学者）らの根本信仰は，諸価値の対立への信仰である。彼らは疑う必要がある肝心かなめの敷居のところで疑うことをしなかった。しかしわれわれは価値の対立を疑うことができる。」と述べている。

ニーチェは，今までの哲学者が立脚してきた前提が，「あるものがどうしてそれと反対のものから生ずることができよう」であることを指摘した。これはニーチェ以前の哲学が，あるものがそれと反対のものから生まれることはありえない，という前提に立ってきたことを指摘したのである。具体的に言うと，「無我の行為が我欲から生まれるはずがない」あるいは「洞察が情欲から生まれるはずがない」といった考え方に縛られてき

[1] 本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）にもとづく研究（基盤研究（C），研究代表者　假屋園　昭彦，課題番号24530829，平成24年度～平成26年度，研究課題名　児童の思考力を伸ばす対話指導力をもつ教師育成を目指した授業デザインの開発）の一環として実施された。

たことを指摘したのである。そのうえでニーチェは，これまでの哲学が真理と仮象，無我と我欲，知性と情欲，誠実と欺瞞といった価値を対立させ，一方に高い価値をおいてきたと指摘する。

ニーチェが指摘したのは，これまで対立するものとして捉えられてきた価値は実は決して対立してはいない，ということである。それどころか対立すると考えられていた価値は，一方が他方を生む，という関係にあるのだ。そして両者の本質は同一なのだという考えである。

（3）本研究の道徳教育への意義

本研究はこうしたニーチェの指摘にもとづき，道徳的価値概念同士を対にして，それらを対比させ，両者の具体的関係性を浮き彫りにすることによって，個々の価値概念の本質を明らかにする授業デザインの可能性を探ることを目的とする。

このように物事の本質を対比的に捉える思考過程は，これまでの道徳の授業展開のなかには全く導入されていない考え方である。道徳の学習指導要領の内容項目には，友情，誠実，勇気，敬虔，生命など多くの道徳的価値概念が含まれている。したがって道徳の時間では，これらの道徳的価値概念の内容を扱う必要がある。しかし現状の道徳の授業は，これら道徳的価値概念の内容を直接扱う展開になっていない。現状の道徳の授業展開の多くは，読み物資料の登場人物の心情読み取りを中心にした展開や，どの内容項目も一律に心の葛藤を乗り越える物語に仕立てた展開になっている。その結果，どの内容項目でも同じような授業展開になってしまい，個別の内容項目を扱っている必然性がみえない。同時に教師の側にもこれらの問題点の自覚がある。したがって教師の側にも道徳の授業がワンパターンになってしまう，あるいは道徳的価値への迫り方がわからない，という道徳の時間への不全感や苦手意識が生まれる。

こうした現状になっている理由の一つに，道徳的価値概念への迫り方が確立されていない，という点があげられる。概念の内容や定義をどのように浮き彫りにしていけばよいのか，という方法論が確立されていないのである。筆者もこれまでこうした問題意識にもとづき，対話場面における具象発話と抽象発話との往還運動をとおした，価値の本質へのアプローチを目指した授業デザイン開発に取り組んできた（たとえば假屋園・馬塲・小峯・京田，2013）。

本研究もこうした問題意識にもとづく研究の一環として位置づけられる。本研究で提案する概念の本質を浮き彫りにする新たな方法が，対概念を対比させる思考過程なのである。先述のように道徳的価値概念には対になっているものが多い。この特徴にもとづき，対概念を対比させながら対概念間の具体的関係を考えることによって，双方の概念の本質を浮き彫りにする。この思考過程は構造主義として哲学ではよく知られた思考パラダイムである。構造主義という概念の本質に迫る思考パラダイムは，学校教育の授業デザインに有効活用することができると考えられる。しかし現在，この思考パラダイムは学校教育での授業デザインのなかに積極的に活用されているとは言えない。この意味で本研究は，哲学上の思考パラダイムにもとづいて授業デザインを開発するという斬新な試みであり，道徳に限らず教科横断的に活用できる授業デザインであると言える。

（4）本論文の構成

本論文は今後，上記の研究を進める際の端緒として位置づけられる。こうした目的のもと以下に本論文の構成を示す。

①ニーチェの「アポロンとディオニュソス」および「明朗」の概念を例として，対概念は対立関係にあるのではなく一体的な関係にある，というニーチェの考え方を論じる。

②老荘思想のなかにも対概念を一体的に捉える視点があることを示す。

③ニーチェの永遠回帰の理論のなかに，暗黙のうちに埋め込まれている対概念を浮き彫りにし，その対概念同士の具体的関係性を明らかにする思考過程が，可能かどうかを試みる。

④対概念の関係性を明らかにする思考過程を提案したうえで，対概念の関係性の例を考察する。

これら一連の検証をとおして，対にした道徳的価値の対比から，価値の本質に迫る思考過程の可能性を探る。

2．アポロン対ディオニュソス

ニーチェがなぜこうした発想をもったか。この発想はすでにニーチェの処女作である「悲劇の誕生」という作品のなかにみられる。この作品でニーチェは，「アポロン対ディオニュソス」という概念を提案した。

アポロンとディオニュソスの考えは，「文化というものは矛盾が中心となって成立している。明るく美しく，楽天的なアポロンの性質をもったギリシア文化の背後には，実は暗く，悲観的なディオニュソスの性質をもったペシミズム（悲観主義）が潜んでいる。」という内容である。これは明るさのなかには暗さが内包されている，という視点を打ち出したことになる。内包されているとすると楽観と悲観とはもはや対立概念ではなく，一体的な関係をもつことになる。たとえば悲観が楽観を支えている，あるいは悲観のなかから楽観が生まれる，といった関係が想定できる。さらに，重なり合う部分や共通の本質から両者が成立している，という関係も想定できる。これらの例は対概念の具体的関係を考える発想が可能であることを示している。少なくとも右か左かといった短絡的で二者択一的な発想はなくなる。

このようなニーチェの枠組みに立つと，「一見，対立しているように見える対価値概念は本当に対立しているのか。もし対立していないのであればどんな関係にあるのか。」というテーマが立ち現われてくる。

たとえば「強さと弱さ」の関係を考えてみよう。弱さに打ち勝って強くなるのか。弱さを乗り越えて強くなるのか。強くなるためには弱さを否定しなければならないのか。このような，一方が他方に打ち勝つとか，乗り越えるといった発想は対立という前提に立っている。

一方で，強さと弱さは互いに他方を必要とする一体的な関係にある，という前提に立つとしたらどんな関係になるのか。たとえば「人間が強さに向かう端緒は弱い自分に向かい合うことに耐えられなくなるところにある」，という強さと弱さの具体的関係についての発想が生まれる。

「善と悪」や「愛と憎」についても対立関係ではなく，一体的な関係として捉える発想が可能になる。

ここで留意すべきは，おそらくすべての対概念を，一つの関係で括ってしまうことはできないという点である。対概念ごとに具体的関係性は異なる。したがって「強さと弱さ」の関係と「愛と憎」の関係は当然異なる。その結果，扱う対概念ごとに具体的関係性を明らかにする必要がある。

3．明朗の意義

明朗の意義をニーチェは「悲劇の誕生」のなかでどのように考えているかをみてみよう。以下の括弧は「悲劇の誕生」から筆者が要約引用した内容である。「明朗さというのは，悲しさ（苦悩）から私達を救ってくれるためにある。悲しみによってできた傷を癒やしてくれるのが明朗さなのだ。この意味で理解するときにだけ明朗さの意味を正しく理解したことになる。何の悲しみもない安逸さが明朗ではない。明朗さの価値は，悲しみと苦悩から私達を救済してくれるところにある。」

ニーチェの見解を筆者は以下のように解釈した。悲しいときに悲しんでいるだけでは，いつまでも悲しいままでそこから抜け出せない。苦しいときに苦しんでいるだけでは，いつまでも苦しいままでそこから抜け出せない。悲しい出来事に遭遇して悲しんでいるだけなのは，自分の運命に忍従しているだけになる。悲しみとの遭遇という受動性を，明朗さという自らの積極性で受けとめる必要がある。悲しみを明朗さで受けとめることこそ成熟した人間の姿なのだ。自分を悲しみから救い出してくれるのが明朗さなのだ。

筆者の解釈をまとめると，悲しさに押しつぶされるのではなく，明るさで悲しさを抱えていこうという内容になる。

したがってここには「受けとめる」，「抱える」という関係を見出すことができる。このように多くの対概念は，反対の意味関係ではなくもっと親和的な意味関係にある，というのが本研究の立場である。それも「一方だけでは成立しない」といった単純な関係ではない。「お互いが相手にどのように生かされているのか，一方は他方にとっ

てどのような意味があるのか」という視点に立って具体的な関係性を明らかにしていく必要がある。この視点から「善と悪」,「強さと弱さ」といった対概念間の関係性を考えていく。そうすると対概念の一体性のなかにある具体的関係性が浮き彫りになるのではないか。

４．老荘思想：価値の対立を解消する方法

価値の対立を扱った思想は西洋だけではなく東洋にもある。老荘思想の万物斉同の思想がこの思想に該当する。万物斉同は荘子の思想として名高い。万物斉同は認識論である。以下にその思想を要約する（森，1994；小川・森，1968：蜂屋，1987)。

（１）万物斉同

人間は自分の周囲に，彼此（ひし)，是非，善悪，美醜，生死，貧窮と栄達，汚辱と名声，賢愚といった多くの対立を見出す。こうした対立の世界を対立差別の世界と呼ぶ。こうした対立が生じる理由は，自分（あるいは人間）の立場という色めがね（枠組み）をとおして周囲をみているからである。その結果，対立差別という価値に違いをつける見方が生まれる。対立はあくまで自分の立場（枠組み）からみた相対的なものであり，絶対的なものではない。人間が実在するものとして信じている二元の価値の対立差別は，人間以外の，もしくは人間以上の立場に立つならば一挙に消滅する。

もともと人為を加えない，ありのままの自然の世界は一体的なものである。この自然に差別が生まれるのは，物事を何でも二つに分けなければ承知しない人間的な思考，つまり人為のなせるわざである。この人為を捨てない限りありのままの自然をみることはできない。この人為を捨てた世界観を無為自然と呼ぶ。無為自然は万物の価値を等しいものとして捉え，一切の対立差別（価値の違い）を設けない考え方である。生と死も同じ価値をもつ。生にあっては生に安んじ，死にあっては死に安んずると捉える。

この思想を筆者は次のように解釈する。価値の対立は，自分の枠組みで物事を捉えることによって生じる。よって必要なことは，自分を大所高所に立たせる力である。高い視点からの枠組みを作る力である。物事を俯瞰的に眺める力である。高所に立ち，物事を大局的に眺めることができれば，すべてのものには価値があることがわかり，価値の違いや対立はなくなる。

（２）大鵬の視点

荘子は，大鵬を例として世俗的，常識的な世界の卑小さを描く。以下にその思想を要約する。

俗人は，ただ自分達の生活圏と生活様式を金科玉条とし，自分達の理解を超えた生き方に非難と冷笑をあびせる。自分の生き方と考え方のみを基準（枠組み）として，それにあてはまらぬ者を非難する。自分が信じる常識（枠組み）によって自らを縛り，他者をも縛る。私達はそうした矮小な存在なのである。人間がそうした存在であるならばどうしたらよいのか。

大鵬の視点をもつことである。空高く飛び去ってこそはじめて日常生活における万端の細事が吹き飛ばされ，それら諸々の細事に囚われている人間のいじましい心も解き放たれる。大鵬の高みからみれば，常識的な非難と冷笑，差別と対立は一切が空無となる。荘子は我々の精神を，世俗的な対立差別を超越した大鵬の世界に解放することを目指した。

小知は大知に及ばす。人間はしょせん自分の器だけのものしか理解できない。小さな知恵は大いなる知恵には及ばない。矮小なる存在として生きる者達は自分の姿を自覚する契機をもっていないだけだ。解放された精神をもって現実を生きるとき，現実もまた違った姿を示す。

（３）対になった運命論

無為自然の立場からは人生観に関する思想が生まれた。荘子の運命自然の思想である。無為自然を人生にあてはめると，人為のはからいを捨て，運命の流れのままに身を委ねるという考えが生まれる。これを運命随順の思想と呼ぶ。運命は幸と不幸，富と貧，名声と汚辱，長命と短命，賢愚といった対立差別で描かれる。こうした対立は人為が生み出したものである。もしこれらの間には価

値の違いという対立差別がなく，価値には序列がないとする万物斉同の思想にもとづけば，これらの運命を自ら受け入れることができるのではないか。

人間が運命を憎むのは，幸と不幸との間に価値の違い（対立差別・価値の序列）をつけるという不自然のうえに立っているからである。もし幸と不幸との間に価値の違いがなければ運命を呪うこともなかろう。一切の変化を自然のままに受け入れ，一切をそのままに肯定できる。天を怨まず，運命を呪わない。おのれの能う範囲の幸福を望み，それ以上を願わない。これらは運命随順，知足案分の思想である。おのれの不幸に焦慮憂悶することもない。富を楽しみ貧も楽しむ。これは元来，中国の天命思想にもとづく考え方である。

しかしこうした「与えられた運命のままに生きよ」という思想は「消極的なあきらめ主義」として「人間の努力をむなしいものにする」危険性がある。

ここで自然を捉える枠組みを変えると，全く正反対の運命論が生まれる。その枠組みとは，自然を自分の外にあると見るか，自分の内にあると見るかである。自然を自分の外にあるものと見る場合，自然としての運命は外からやって来ることになる。よって運命自然に従うとは外からやって来る運命に従うことになる。一方で自然を自分の内にあるものと見ると，自然とは自分の本性であり，自分の意志になる。運命は自分のなかから立ち現れてくることになる。したがって運命自然に従うとは自分の意志を貫いて生きるということになる。運命自然を自己放棄と捉えるか，自己主張と捉えるか。ここには他力道から自力道への転換がみられる。荘子の思想にはこのような対になった運命論が含まれている。

５．ニーチェの永遠回帰論に埋もれている対概念

次にニーチェの運命論を紹介する。ニーチェの運命論は永遠回帰論と呼ばれ，ニーチェの主要な思想の柱の一つである。永遠回帰論は人生の捉え方を示してくれる。

永遠回帰論を考えるにあたって次の例で考えてみることにしよう。読者諸氏は次のように考えた経験はおありだろうか。人生が二度あれば…。こんな失敗は二度と繰り返さない。こんな職業には絶対就かない。こんな人とは絶対，結婚しない。もっと頭のいい人間に生まれたい。もっと周到に人生設計を考える。どうして私がこんなポジションで冷遇されているのか。どうして私にこんな仕事が回ってくるのか。こんな人事異動がありうるのか。こんなに頑張ってきたのにこの仕打ちがありうるのか。こんな人生は二度と歩みたくない。こんな人生はこりごりだ。もうたくさんだ。

人間は人生のなかで上記のような気持ちに陥ることがある。ともすれば心が折れそうなこうした経験に対して，ニーチェの永遠回帰論は新たな枠組みを提供してくれる。

（１）永遠回帰－自分の運命を抱きしめてあげましょう－

永遠回帰論は「ツァラトゥストラはこう言った」というニーチェの主著のなかで出された思想である。永遠回帰論は次のような思想である（ニーチェ，1995；宮原，2010）。

我々は誰しもときには「人生が二度あれば」という思いに駆られるときがあろう。そのようなとき，二度目の人生はどんな人生にしたいと思うだろうか。今の人生とは全く違う人生になればと思うかもしれない。人生をやりなおしたいという気持ちになることは誰にでもある。自分がこれまで歩んできた人生をそっくりそのまま繰り返したいと思うだろうか。人生をやりなおしたいと思う場合，人は別の人生を歩みたいと考えている。しかし，それはありえないのだ。二度目の人生も，自分がこれまで歩んできた人生と全く同じ人生がそのまま繰り返されるだけである。かりに何度生き直すことができるとしても，自分がこれまで歩んできた人生が無限に繰り返されるだけである。永遠に元（最初の人生）に戻る（回帰する）のである。現実からの逃げ道はどこにもない。

これはとても厳しい思想である。人間誰でも自分の人生で嫌なことや辛いことはたくさんある。取り返しがきかない過去をもつ人もいるかもしれない。それが何度でも繰り返されるのだとしたら

誰でも嫌になる。

ニーチェは，自分が歩んできた人生がそのまま何度でも繰り返されることに対して，何度でも自分の人生を「よし，もう一度！」とそのまま引き受けることが人生の肯定なのだと主張する。

一方で人生を否定した厭世主義という考え方もある。この思想は次のような内容である。人生はむなしく，苦しい。生き甲斐などというのは思い上がりだ。人間は永遠の欲求不満のなかでうずいているだけである。

こうした厭世主義に対し，ニーチェは「生は苦悩である。生きることは悩むことだ。生きることは厭わしい。しかしそこから逃げない。ごまかさない。その苦痛のまっただ中におりていくのだ。そしてその苦痛を肯定するのだ。逃げ回っているだけでは，いつまでたっても自分の人生を肯定できない。」と考える。これは人生に真正面から取り組む思想と言える。

このニーチェの思想を筆者は次のように解釈する。すなわち，苦痛から解放されたいと思ったらその苦痛のなかに飛び込んでいくことだ。苦痛のなかに飛び込んではじめてその苦痛から解放される。苦痛から逃げ回ってばかりでは，いつまでも苦痛から解放されることはない。たとえばこの考えを日頃の勉強にあてはめると，苦手教科から逃げ回ってばかりいても苦手意識はなくならない。苦手意識を払拭し，苦手意識から解放されたいのなら，苦手教科のなかに飛び込んでいくことだ，という内容になる。

ニーチェは以下のように考える。自分の悲しみに酔う姿や，かわいそうな自分に酔う姿は奴隷根性をもった人間の姿である。また世の中には無我を説く教えがある。その教えは，生きることに疲れ，この世界に倦んでしまった人間の陰湿な知恵である。宗教や道徳のなかで我欲は悪者扱いを受けてきた。我欲を抑圧し，神に，そして他人に奉仕し，自己を空しくすることが美徳だとされてきた。しかしニーチェは健康な我欲を，力強く健康な自我を，そしてはつらつとした自己肯定を賛美する。

人間は自分の過去への復讐心から抜け出さねばならない。過去に復讐できない腹いせに，自分の不幸や絶望を他人のせいにしてはならない。そうした復讐心に囚われているかぎり，人間は自分が自分の主人でないことを認めることになる。自分の人生を左右するものが他人であることを認めることになる。そうした奴隷根性は捨て，自分が自分の主人にならねばならない。自分の運命の下敷きになるのではなく，決然として自分の運命の上に立たねばならない。人間は自分で登るべき階段を作らねばならない。高みを必要とするから生は階段を作り，それを登っていこうとする相克が生まれる。

安逸というぬるま湯と折り合いがいいのは中庸という美徳だけである。ニーチェは，偶然にもとづくありとあらゆる不幸や不運を鍋に入れ，その鍋がよく煮えたとき，全部食べて自分の栄養にしろ，という寓話も用いている。自分を愛せない愛が他人に向かうのではない。自分への満ち足りた愛が他人に向かって溢れ出るのだ。

（２）永遠回帰論のなかに対概念はどのように埋め込まれているのか－偶然と必然－

以上のようなニーチェの理論のなかに，対概念がどのようなかたちで埋め込まれているのかを考察してみよう。永遠回帰という運命論のなかに埋め込まれている対概念は「偶然」と「必然」である。

私達の人生は偶然にかなり左右される。人生は運とタイミングによるところがある。自分が生まれた時代，生まれた地域，この両親のもとに生まれてきたこと，天から与えられた私の頭のよさ，今の職場，まわりの人達，そのときそのときで目の前にふりかかってくる仕事は偶然によるところが大きい。そもそも自分の目の前にある選択肢も偶然と言える。私達はみな，最初から長期的な人生設計を立てているわけではない。人生のそれぞれの時期で，その都度，天から降ってきた偶発事に対処しながら生きているのが人間であろう。

しかし人間は，そういう偶然をただ天から降ってきたものとして甘受しているのではない。偶然に翻弄されているだけでは「運命の下敷き」になってしまう。老荘思想のように運命随順になってしまう。生きていれば誰でも恨みや辛みが募る

こともあろう。しかしこのような運命の奴隷になってしまっては，自分が自分の人生の主人公になれない。

ニーチェは「これらの偶然をすべて自分の意志で望んだことだと思え」と考えた。ここでニーチェは運命と意志とを一体化した。ニーチェは，老荘思想の運命自然のなかに現れた，自己放棄と自己主張との対になった二つの運命観を，一体化して捉えたと言える。

私の人生で起こった出来事はすべて私が望んだことだと思え。こう思うことで，偶然が必然に変わる。ニーチェはこうして対概念を一体的に捉えた。自分が望んだことにすると，自分で自分の人生を肯定することができる。肯定することによって，運命を外部にあるものではなく自分のものとすることができる。自分の運命を，自分のものとして認めることができるようになる。自分が自分の運命の主人になることができる。ここではじめて，今の自分に言い訳し，辛い現世の苦痛から逃れ，来世や彼岸や神の国に希望を託す必要がなくなる。ニーチェのルサンチマン（恨み）という概念は有名であるが，こうした捉え方をすることによって，この世にルサンチマンをもたずに済むようになる。

筆者はニーチェの思想を以下のように捉えている。人はみな，こうとしか生きようがなかったから今，こう生きている。別の生き方ができれば，今はこうなっていない。しかし「こうとしか生きようがなかった」のではなく「こう生きようと思った」から今こうなっている。そんなふうに思える人生を自分で作っていけばよい。たとえ不本意な結果になったとしても，自分で枠組みを変える力が必要である。

人生が二度あるのなら，自分が歩んできたこの人生をもう一度歩みたい。この両親と，この兄弟と，この友人達と，この同僚達と，この夫や妻と，わが子と，もう一度人生を歩みたい。そして，そんなふうに思わせてくれた自分の人生を抱きしめてあげたい。誰の人生にも辛いことはあるけれど，楽しいこともあるのが人生なのだ。

6．関係性の捉え方

ここでは対概念の具体的な関係性を明らかにする方法を提案する。

（1）リフレーミング

いままで対概念を一体的に捉えたうえで，その関係性についてみてきた。ここまでの内容をみると，対概念の関係性を明らかにする有効な思考過程は，「枠組みを変える作業」であると言える。

すなわち，対概念の具体的関係性を明らかにするための思考過程とは，弱さや我欲という，一見，価値がなさそうにみえる概念への枠組みを変え，その概念に積極的な意味と位置づけを与え，価値の捉え直しを行う作業として定義することができる。

心理学ではこの作業をリフレーミングと呼ぶ。フレーム（frame）とは，人間がもっている価値観や物事の解釈の仕方を意味し，正式には認知的準拠枠と呼ぶ。したがってリフレーミングとは枠組みの転換を意味する。

リフレーミングは看護カウンセリングの分野でもよく用いられる。看護カウンセリングにおいては，病気にかかるという境遇に対してリフレーミング作業によって，できるだけ積極的な意味を与える試みを行う。

（2）関係性の具体例

対概念にはどんな関係性があるかを考えてみよう。

①　強さと弱さとの関係

強さと弱さという対概念の間にはどのような関係性があるのか。この関係性を浮き彫りにすることによってはじめて，強くなるための道筋が明らかになる。そこで強さと弱さとの関係性を次のように考えてみよう。

（ⅰ）弱さを否定して強くなる。

（ⅱ）弱さを肯定して強くなる。

（ⅱ）があるとしたらどんな方法なのか。つらくなったら休んでいいよ，という弱さを保障されたなかではじめて，強さへの志向性が生まれるのか。あるいは弱さを否定し，弱さをさらけだせない状況から強さへの志向性が生まれるのか。

このような問いを立てていくことで，強さと弱

さとの関係性が浮き彫りになると考えられる。

②　無我と我欲について

無我と我欲という対概念の間には，どのような関係性があるのか。人間は，はじめから無我の境地に到達することができるのか。我欲に溺れた世界を経験し，その世界の醜さや浅ましさを経験してはじめて，無我への志向性が生まれるのか。このように考えると，次のような関係性が生まれる。

（ⅰ）我欲をとおらないまま無我になれるのか。

（ⅱ）一度，我欲をとおらないと無我は生まれないのか。

人間は一度，酒池肉林に溺れないと無我の境地になれないのか。それとも生まれたときからの聖人君主がいるのか。

無我と我欲についての関係性はこのように考えることができる。このように問い進めていくことによって，対概念の関係性を浮き彫りにすることができる。

③　自律と他律について

自律と他律という対概念の関係性は次のように考えることができる。すなわち自律に至るまでには他律をとおる必要がある。人は，他者からの教育という他律の時代をとおって自律した大人になっていく。他律の時代に律するという力を習得するのである。そしてそのうえで，自分で自分を律することができるようになる。

以上みてきた三つの対概念の具体的関係性については，今後，さらに検討する必要があろう。

7．弱さの力

約10年前に出版された「悩む力　べてるの家の人びと」という本がある。この本は，精神疾患に苦しむ人々の共同生活の場所である「べてるの家」を描いたルポルタージュである。社会的に弱い立場にあり，精神疾患という「弱さ」を抱えた人達が，どのようにして自らの弱さと向き合い，仕事をはじめ，自立することができたのか。

以下にその一部を要約引用する。この引用のなかに，強さと弱さという対概念の関係性を読み取ることができる。

「同期入社のなかで女性は自分だけ。数少ない大卒キャリアとして弱みは見せられないという思いもありました。そうした頑張りが今から思えば病気の伏線となる。私は必死で負けまいとして頑張りました。しかし，どこまでいっても幻聴につきまとわれます。私がいちばん見せたくない，泣いている弱い自分までも見られたとき，とうとう強がっても強がりきれず，突っぱねられなくなってしまいました。これから頑張ろうというときに，ふん張ることができないのです。どこにも自分の弱みをさらけ出せなくなったとき，限界が来ました。」

「ファストフード店のアルバイトに応募して「暗いからだめ」と断られた。それが「べてる」ではみんなが「暗くてもいい」と言う。なにしろ病気なんだから。それをそうかと納得したときから明るくなってきたかも知れない。それは病気に「打ち勝とう」とか「克服しよう」とするのではなく，そうした「かたくなさ」から離れて病気を自らの生き方のなかに折り込んでいこうとする「ソフトなかかわり」のあらわれなのかもしれない。」

このような記述のなかから，強さと弱さとの関係性を浮き彫りにすることができる。そしてその関係性をとおして，強さと弱さの本質に迫ることができると考えられる。

8．おわりに

本論文では，道徳教育で扱われている価値概念の本質を浮き彫りにする思考過程として，対概念の関係性を考えるという試みを提案した。本論文では，対になっている価値概念は対立関係にあるのではなく，一体的関係になっているという仮説のもと，対概念を対比させ，その一体的で具体的関係性を明らかすることが可能かどうかを，理論的に試みた。

その試みとして，ニーチェの永遠回帰論に埋め込まれている対概念を浮き彫りにし，その一体的で具体的関係性の考察を試みた。その結果，対概念の間に含まれる具体的関係性を浮き彫りにする理論的試みは可能であった。

今後はこの思考過程を継続し，道徳の授業のなかでこの対概念を対比させるという授業デザイン

を確立させる研究を進める予定である。

引用文献

蜂屋邦夫　1987　老荘を読む，講談社

假屋園昭彦・馬場智也・小峯三朗・京田憲子　2013　教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅰ）－小学校低学年における対話活動の可能性を探る－，鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編），64，107-135.

宮原浩二郎　2010　ニーチェ　運命を味方にする力，PHP研究所

森三樹三郎　1994　老子・荘子，講談社

ニーチェ　1966　悲劇の誕生，秋山英夫（訳），岩波書店

ニーチェ　1993　善悪の彼岸・道徳の系譜，信太正三（訳），筑摩書房

ニーチェ　1995　ツァラトゥストラはこう言った，氷上英廣（訳），岩波書店

小川環樹・森三樹三郎　1968　世界の名著４　老子・荘子，中央公論

斉藤道雄　2002　悩む力　べてるの家，みすず書房